

勢語騰對

三

1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

70 60 50 40 30 20 10 0



勢語臆斷卷之三

卷之六

卷之三

四三段  
ひくかやめとくよへとおもてゆりう  
賀陽親王桓武天皇第七皇子母夫人多治比氏二  
品治部卿貞觀十三年十月八日薨七十八歳  
或抄三品治部卿とゆうへらひまんの齊衡二年正月  
二品とゆうたゞく文德實錄第七云齊衡二年春  
正月壬午朔戊子加三品賀陽親王二品同第十二云  
天安二年八月己丑朔丙申勅賜二品親王帶紋榮  
冕物語よむくやのくくわくそを細工へかくけれ  
せきのみと女とあやめくそいがくくせくそふたすひるく

人情の如きはわざやう

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります  
田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

田の事はいふとあるまじきがよしのやうあります

うるまの里のアラハツの山を今あてて  
アラハツの田をもとよせテアラハツを  
アラハツの山田をもとよせテアラハツを  
アラハツの田をもとよせテアラハツを

はるか日より人をうる男を  
いやりあわせたまの田長へあらみじめほそんあくをす  
くよしわざうともふとまくさくまくわらひ

四  
五  
六  
七  
八  
九

多國より縣より田舎よりちよよ矢を康永より奉  
仰するに町のあくまでえりそむくや堂

只見りてはも田舎と云ふやうと云ふの  
如と云ふをいひてゐる。嘉祥三年五月近に於大  
極仁寿二年但馬守齊衡元年正月讚岐守と云ふ  
が付く天安元年五月伊勢守二年六月肥後守  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと  
税文曰餞送去也除曰以酒食送也

說丈曰餞送<sub>送</sub>去也除曰以酒食送<sub>送</sub>也

嘉かくまみぢうを  
ゆゑび男あよまき  
もんづれてもひすがる  
みけいへづくえもがく  
千時通當皇名之開  
還日產於基土あ葉  
くまの孝通天

よのまくわゆうとすうじあひよきほぢ  
かくわくらうあふくねれれふかまくわくがうむつまか  
か帖はオニのるにとくとキヌのるにりふうわくと  
き喪のまとをとよう喪へきとくいとくとまく  
をてまくわくまくぬまつとくもまくわくまくわくまく

主ひはうやくまことにあつてうそく  
れとあつまふをもあらわす陰徳陽報の  
うきうきあすかよをてあがましくおもへ  
ゆゑゆゑんすすれまくはりくはるくは  
ひそひそおおきくはりくはるくは  
もももももももももももももももももも  
とももももももももももももももももも

旅の心をもとめとす  
はあをわすれても  
もぐらみて

あはれはあともみづゑを争ひゆ  
ひきをひきとひきつるのをゆ  
くと全綠をうる年年のふみかのくもふく  
もりゆくよ家としよりかくめくもくわくす  
もとめくめくめくめくめくめく  
涌くもくもくもくもくもくもくもく  
ねくはくとあくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもくもく  
史記平準書曰顏異與客詰客初令十下ヒキ有不便者  
李奇曰異與客詰道詔  
令初下ヒキ有不便處也  
九卿見令不便不入言腹誹論死上自是之後有腹誹  
之法以此而云卿大夫多詣諛取容矣楚辭九章惜

往日吳信讒弗味<sup>アシテ</sup>芳子脣死而憂朱註云味聲之食物咀嚼而審其美惡也

四十五段  
いまもたわらふとてはあひやう

いまもたわらふとてはあひやう  
いまもたわらふのじとんのかへり

冊のまとつてもうすとちよちよ傳ひと伝ひ  
かうれどもひそく歌の花をすのとみゆき  
いくさん男ふくのいとんとわひうらうとんを  
かくやわうあん

ひむかのとくわきくは拾きよ

あむかむらまくさけすわくも万汗アソ  
みせやんすりてちゆつとせよかくとくとく  
と歌まうけひとうううううううううううう

戀夫君歌一首并短歌

左耳通良布君之三言等玉梓乃使毛不來者憶  
病告身一曾千盤破神示毛莫負ト部座龜毛莫  
燒曾戀之久爾痛告身曾伊知白苦身示深保里  
村肝乃心碎而將死命示波可示成奴今更君可  
吾乎喚足千根乃母之御事欵百不足八十乃衢  
尔タ占尔毛尔毛曾問應死吾之故

及歌

トウ部辛毛八十乃衢毛占雖問君乎相見多時不  
知毛

或奉及歌曰

吾命者惜雲不有散追良布君示依而曾長欲為  
右傳云時有娘子姓車持氏也其夫久達年序  
不作往來于時娘子係戀傷心沉卧疴疾瘦羸日  
異忽臨泉路於是遣使喚其夫君來而乃歎散  
流涕嘆號斯歌登時逝沒也

(風きあり)

一日もとみくわまとよみよこうりつは草木のひりりやま  
さうてつむのむすむらりくとへ舊事本記曰饒速  
日尊既神殯去坐矣高皇產靈尊以為良泣即使速

飄命將上於天上慶其神屍骸日七夜七以為遊樂  
哀泣飲於天上矣古事記云天若日子死之乃於  
其處作喪屋日日夜夜以遊也

(夢)

ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
やくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
螢火亂飛秋已近

後撰掌草引此是乎は御集云船部子乎入らつて  
とせつてくれよそらやう古事記云八千尋神の御  
あすくもやく耶をもとめし鳥もうちやえをゆくよ

教儀日誓叔  
夜阮步兵碑  
簡邁世局隱  
慶巨室反真  
歸漠

おせむすてみたまゆるやうゆくとのくよひやうあせふと  
おもとこゑゆくをもゆく泡やうせとと五ち通すれ  
へてゆくはい泡やう五事よ泡厂のすよ  
え  
ままでくゆも船もよからぬと見えしものや  
まく船もよからぬと見ゆも船もよからぬ  
きこゆかくもよかわゆゆよかくとあるわゆうん  
あゆてゆーとのよ船のやくちくらすむく船  
よけくせくいりよけくすくすく魂ハ冥漠よゆす  
わゆくわゆくのたぐいわゆよけく魂よくらひゆ  
里とくつまくまくとくとくとくとくとくとくと  
くのやくくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ねざりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

さうがれの日くじやくのまことかくあくおとかすき  
残影古今掌中絵はそんぢやれくとくへやくすき  
あとかくくぬよかくうてあくよくそれとよとく  
アキセんとも行くへづくへぞくりとれいのとくく  
ああーきくへ世うの無事とあうとくとくとく  
あううのあくとくとくとくとくとくとくとくとく  
じう男いとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ひうとくの圓へんうとくとくとくとくとくとくとく  
月日をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
日をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとく

ゆふとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

よのまとてやがよよれやる  
せやのくわゆるもとおよえり  
とくうりんの傳され

のうかじめとまく

先づもおれまへかよとくらむれりお  
とれよりけのひよまよとへりよめやう  
四十七  
しり／＼男のんくよいをとせよ女わうりうととの  
男とわくわくとひきとわくとわくとわく  
いく／＼ひよとくわくとわくとわく  
ねやぬとのゑてわくとくわくとくわくとくわく  
を今集ゑ田ふわくとくのまよれととくわく  
わくとくわくとくわくとくわく

お帖えのゆのうとあくねやわう奥義おもひへ  
昭あおやぬごとくへすりよ陰陽印めりもくらべ  
くろきをりてゆりもくとめゆとれはえむくくら  
つりうるわをれぐくみくくによまくもとくす  
これとひくをわざとふとゆくれもとくす  
今まどもとよくもくわくとくとくわくわく  
あらゆのゆくよくとくわくわくわくわく

あかねとおあそびをめぐらせておはいようをあつてやど  
門とまよ羽衣を宿すくとまうふくとくわくわくと  
川と流れつけとあくとくとくとくとくとくとくとくと  
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

至  
内侍あくよみのひもまくらわうの所すとくれ  
う祐  
口つまわぬよむかくせよ流きとくのよせひをくわと  
おもむよちぬやえよかくてほんぢりて後ゆわのよも  
うあとくわ志ふかこせらるるをとんわくへす  
こくあくよみのひくわくわくわくわく  
もひわくわく内侍ゆくわくわくわくわく  
深歎内侍吉太良相女徳春母

深殿內侍吉光良相女孫春母

大ぬきよけりやくのまきひもせよまやくあきらはる  
えりひやうだりひやね  
あらもねよとくまむすりてりくをぬまくわく  
とくくひりうくふくよのほんかくはく内行とく  
れきそそつひふよる浦とくひあがれて後まよと

おやうりう時内侍のそとゆて大ぬまよからみ  
くとくあどくわや中ひのとくすもんお宿舎はむへ  
つととめ

うかへてくと後まよ角のうきよりう女うちあがけう  
うかへ日赤れよ欣感とあうすくもうやもう泊ちう  
うかへをうしりはまとよあれうちやうよま年と  
とまくまにえ、うかへうらふすおほねのいきうと  
本紀元恭紀よう月よもみうじうじうどうや  
うせにまへてうかへをうきうきうきうめうひと  
うかへかうじうゆゑみうきあきをたまへ木梨脇  
ちよう軽太娘皇女と寄通のううれうねう軽皇女  
伴縁國へ流れをうふふた恩坂大中姫の脚後ちう  
あうれうううえ後の妹うらへ后ううせううううう  
倒もうれうむうううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう

わくとちかへ代りわく  
事ひみゆ儀すきうるは  
れほきむと組すがま一  
の例すれどもおおかた  
らかくらうてもくらう  
いかくらうのやくみそて  
一よくらうのかくとを  
よくらうを儀

五事を議すやうな女

妹背山すとてやくを望の川に宿す  
冬風雪の朝も暮れも妹のそばにてやくを望む  
妹は行方失れとぞとよとよとよとよとよとよ

續貞今立二臣不知矣、議員

さるはりとくはうそかわすくらとくにむけ  
續古今二題不痴を儀皇  
身のまへ因脚も下へせんもうとねてきらう  
またおもふうんづれもうみりくふよりてとあふる  
おじう古今集哀傷み妹の身ゆりうすよみうると  
おだよのれ

やくかくとらあまくはうけぬまうがかりとよ  
ひしむ彼妹のわくわねうけのあひうてきくとくう  
業平の代實、綠み教祖もお抱いつるをや  
めくねづけよめりきりまとくのしずくとくとく  
計ふ載ふ一うきうくまのまとうあうへまく不乃  
未のまくすかくちよふ方葉半十す

おもひづきすまひうふらはえもひれど  
是より候もあらうにまたのむちも居り  
とくに候もくのひうふらとうやくわらへ  
やうじやうじゆうじゆうじゆうじゆうじ  
おの直ままであひねのまよひかくひよひ  
とくとくれとくとくとくとくとくとくと  
まのひうつすをたまひふきかくひうつす  
ひ日おれみめのまとしとまとしとまとし  
ひちとしとしとせとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくと  
かしきの意を後撰すまほ年月日を記す

卷之二

まよとまよをまよじすまよや  
あわゆれよ忠告  
もやよひとよすまよをまよにからく  
れんぐう

ちふわみよ忠之

はまのやくわづひゆみともうかくねとほしりふ  
もつよもよこまよやうり万葉すすれ長歌もよま  
みすみつるゑかわきみかむとすれておさかわらう  
れきわれはまのあそびくまくまくよ  
くまづけりはれうじくわくわくのあそびくまく  
わやくわくしきをやううとおま表重かくと  
くるてよふとわくひよすよとせと

毛詩小弁之

ゆくわとあひへうきかづひをせらあめりす  
源氏物語總角ふくわくおとくひく娘もあれ  
やまむねさうとさくもやくもくすくはくすもわぐみ  
をとくつまくやくよくすくすくすくすくすく  
六帖

用千金謂左右曰敢有諫者斬荀息聞之上書求見  
靈公張弩持矢見之曰臣不敢諫也臣能累十二博  
基加九雞子其上公曰為寡人作之荀息正顏色定  
志意以基子置下加九雞子其上左右懼相息靈公  
氣息不續公曰危哉荀息曰此殆不危復有危矣此  
者公曰願見之荀息曰九層臺三年不成男不耕女  
不織國用空虛隣國謀議將興兵社稷亡滅君歟何  
望靈公曰寡人之過也至於是即壞九層臺也

きよよとくらへととかみともぐのむといへきよよん  
うれしなりうれとくわくはく乃のとく なほまん  
うちまくつよくとナリ付るもむかうりせ  
はものうちすとくせむう事るや情也日記よ三刀つ  
きよかくのすれまゆるを十のこくまふにとくえ  
とくあくくまよるのくわくまくしもひてくわくは  
てけあいくくそりもくくくもくうとやうりく  
きよがくうかくをかまくめくらめくまくがのむ  
きよはくうじよ車とく只例のゆ文とくにせた  
きよくうくはくとくもくうくとくのくわくとく  
數書くとくとくとくとくとくとくとくとく

少きのり云  
古本忠岑集  
ニ  
きの子ハ子子  
てまく一キ  
ぬともととあ  
ゆもももも

昌黎先生集卷之三  
續編  
昌黎先生集卷之三  
續編

せうきりかよはるをまく  
いくつもあらしらむのせふと  
くわくと  
おもへぬのうもせぬへとくわくちせとねくわく  
はせとよくわくへとせとく男女のせよせやう  
のうすとせよせのとくもせぬへとくわくわく  
れせのくわくとくわくわくわくわく  
くわくはく拾きよとくわくわく  
もうて車をとくわくわくわく

物風すかまひにまづよわふみとくからうと  
續を今此田あらわすがほんは様もまのまあと  
キとまえてそのさよみゆきよのへとくにゆくや  
ゆれまわとあめりやのゆとくのゆをたゆかに  
まよかわくとおきとおきとおきとおきとおき  
とくのやくとくよをよとよとよとよとよと  
ゆよちよとよとよとよとよとよとよとよと  
よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

おへゆるくとおもひて  
せうぢ今爲題あくへよく  
せうぢうやう狸繁経云  
此身無牽念て不往猶電光暴水幻也亦如畫水隨

書隨合あひ文のまゝうりあふねと書へゆるをえて  
うれしうとせよりもかくもあへかふとぞめぐらまの  
うふくわくうりあふよめうらうらうらうらうら  
れおわくわくあひとぞくあくとあくとあくとあくと  
ようくようくとくみくわくわくわくわくわくわく  
くくくもくくく  
五事主  
みのくすむくくくをいのらとせよわくくくいつても

りよとあひてれありあるのまかとくつらう  
東  
ゆづらふらうとやうわまやまと様子あらは  
草家  
あんのまくとまをいもせんせんとゆと  
新古今  
ゆづらふらうとやうわまやまと様子あらは  
あくまくかくこよまやまととえものまくわまやまと

作者の冠より男女のすれわざにてひみくとや  
かうといふすよぬ色のよやんへ化すと  
辛良  
しりととここの前裁みまえうきりよ  
草紙  
植ゑひめきよやまくらめくわく  
せんぢへあ栽ますまのくよそ木かくとうるがす  
名う後園もくらうむくう朗詠集みあ栽とめの題よ

今より多くあらわすとうへてゆき  
を今集まくのあ載よるましもひつけて枕りまふと  
き大あめび、まことにねむちまのまうち柔やうりを  
まうりきうじをみあめくつけてまうりきうと背毛よつを  
朗詠集み草ふあう載詩多見載花悦目傳<sup>フ</sup>支時豫  
養侍開遊自吾閑寂家僅倦春树春载秋草秋ふよ  
よふもあこときくへうくさみち今よ秋歌よ入るわかうつ  
もれやうれともううへたきのよまでれよのえもよま  
とううみづみのえもくは撰集み、日中かみ十日もくよ  
安節花やつためらもみくらだとせよやうへてとく  
もあ載みうるい秋だう

はるかに見ゆる事無く 桃の葉をもみの木のあくび  
ひそかにやむかとすうやくゑはせうわうま  
花の葉をもみの木の根を ももせんねとひの根と  
まゆくもみの木の根をひもせんねとひの根と  
あよみやうがりもみの木の根をひもせんねとひの根と  
え時すよまくはくわやうをきからまくわよもす  
離騒ち朝飲木蘭之墜露ニ夕餐秋菊ニ  
落英ニの現ニあるもすくわうふくわくちくわくわ  
よよくわくはくわくちくわくわくわくわくわくわく  
はくわくの時も雨も風もおこりぬてはくわくわくわく  
とあくわくちくわくわくわくわくわくわくわくわく

じうとくとおなづりくねきとトウかまきちやんち  
こせたりりかてよ

からすらすれりのよこすくらるねやり 指  
送集を教も五日ちんそんとうちんと山す  
けのこふいとてくめまちのねのしもえこもえすと  
てもまちまひ母

わきはまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
續齊諧記云屈原以五月五日投汨羅而死楚人哀  
之每至於此日以竹筒貯米投水祭之漢建武中長  
沙歐曲白日忽見一人自称三間大夫謂曰聞君  
常被祭甚善但常年所遺苦蛟龍所竊今若有惠可  
以棟樹葉塞其上以五色絲轉縛之此二物蛟龍所

憚回依其言世人五月五日作粽并帶五色絲及棟  
葉皆汨羅之遺風也云くちやくとくひなづひとりて  
ありくゆくものなれへふ傳の意り  
はあらゑぬまうそすくらるゑへ節まくわからひき  
とくわくをあんやむとく

わや先とて棕とすくはりくとくふへやめときもく  
日じわへらくかくはつてれのへとみすくはやとくも  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おこざる字と附くうゑへ野よあてくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
みおとくのりとくとくとくとくとくとくとくとくとく

天智紀云七年丁卯夏五月五日遊獵於蒲生野

もくをとこゆかまくらふよゆひてねくす

さくらの歌

いきそうちもひのびとへぢくふすまうひやくとあすくよ  
續は撰ゑ一巻卒わらひとあらひとくにと  
みわくとくみわくとてものちくとひくと  
遊仙窟始知難逢難見可貴可重可怜病鶴半夜驚  
入薄媚狂鷄三更唱曉 伴勢集 批把左右

拾遺集忠見

い川をよびてゆく。やまのうねりはまかにさす  
むらめぐらしきのあやめあらわし

西にやうみまちとくらにたりてわすれやむさん  
は採集題あくよもへしすとるをめどりとゆめ  
ふすとあやかさんとゑやきとすと有成往と後採よりま  
すやうと行まいきとまともと今流布もとによられ  
まちとくらがすみえわんやりよくといたすひ乃  
くまてなまくわづれなまめとまくゆきす  
あすくして、まくゆきのめれくとくまくゆきす  
まもまくじてもうとあやれいとつれきとくま  
やまくくよとくまくおやまくとくまくくせぢやう  
奉書之  
事のまくわすくあくよもへしすとるをめどりとゆめ  
日  
ひひやうくもううわすくわすくまくよもへしす

かよ女のえさうあと年と見てよひきもす  
けうとくひすと玉京山うやうりとえらすかりよ  
あらそくまくひくわんのうをくにとくよわすとがれ  
もとお名のねまくわ

おもすくわざもすくめとくめのわすくらのやうを承  
確は撰魚四葉草がてうこましまかたれてもくらを  
わづかくわづかくわづかくわづかくわづかくわづかく

たのみすくとくら  
古今

古今  
ちづれのよき處をあらわすとてしもとを也  
し  
男婦  
やくわくてうひむすへわやうりて  
かくふもひくもせんねせんとあとあくとくら  
をかゆひまむいりよゆゑもまきとれすのやうりやうりを

敬儀曰廬周  
礼十里有廬  
廬有飲食賓  
客行道所舍  
也又祖屋搆  
名漢志在野曰  
廬曰中屋也

うへやあは、よこよきのやへやへやふるをもじとら  
わくわがまくわくかまくらもつ  
わくわくわくわくの田かもく  
ほよみゆくとくま内のひとのまくわくわく  
かともまよひがはのまくわくわく  
まよひよひたもしれなまくわくわく  
これととののわくとも  
きよむちゆうかう唐薛能詩テ  
吹落讀殘書テよむかうあはえ田山テものほ  
ともかくすれどもやのく  
いと在とくく  
いとすまきのまくわくとくわくすれども

三

家作りやのやううとと申すとおもて入る  
おととこれゝへと奥うちよんと女  
ゆどきううやくせのちあれやすえんのかづれもせあ  
あ々雜下野ちよくまつもあうま年のうれいと  
うとわのふれいとみくわいとせきもや  
うとうみくわいとせきもやめくわざくわ  
れもせあみくわいとせきもやめくわざくわ  
うとあうをかくわくわくわく  
まうてこれをよむうまうきみをせしれこの男  
ゆくよつまくはまとつまくはまとつま  
まくはまとつまくはまとつまくはまとつま

敬儀曰韓詩  
外傳人死肉  
骨歸于上血  
歸於木魂氣  
歸於天其陰  
氣薄然獨存  
無所依也故  
為鬼云々

くらへと子姓とすらあつれりとてうやく  
うきてゆきうる者陰氣とゆき思ひあつてはま  
うお集みしは國をうひ取ては盛にゆす  
重みふとわまと車をうてうきうる氣盛  
うむのゆき思ひあつてうせられはねのうめも  
えあつてすらうすらうすらうすらうすらう  
うやうやうやうやうやうやうやうやうやう  
と女のすみあくてもうあくの女めとのくらへうすら  
うきうきうきうきうきうきうきうきうき  
よかうよかうよかうよかうよかうよかう  
すねぬかくのすくまくすくまく

追考 兼盛集

是はすくよきよきよきよきよきよきよき  
てくくみえみえみえみえ  
とくえおううううはとくえおうううう  
わくわくわくわくわくわくわくわくわく  
毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う毛う

おりてからやひうよとせせや田つらゆよとせ  
あえやうりくのかくうせよとせすせてとせ  
うよとせくうくうくうくうくうくうく  
させやうあととせもせのうううううううう  
成る毛詩北山之什大田章云彼有遺秉此有  
滯穗伊寡婦之利列子云林類年且百歲底春被襄  
拾遺穗白氏文集觀刈麥詩云復有貧婦人抱子在

其傍右手秉遺穗左臂懸獎筐延喜式第五十雜式  
云凡百姓被雇外稻之日不得率人拾穗燒良  
しり男束といふもしくいひますと

やへつゝて

行後のみかがくと申す事とかくする事やくわざえ  
後擇もせ事ともひうべて行うる事もて事とかくす

つことじふくろ千載にとみ成つあ方トモウテて

ほきんとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくす  
けちゆとつまふくろとあるのを垂とへるれどもうか  
かくてあいとやまとまうううれしりてよめりとまうと  
ていれいて

法華經信解品云于時窮子悶絕躰地父遙見之而

語使言不須此人勿強将来以冷水灑面令得醒悟  
追考竹取物語み帝目へたゞのうそアヒヤマ  
くみとすひい経もうからしてつとつとまう  
みすとまのうそとまうそとまうそとまうそとまう  
ひてアヒヤ

おうすゑを宣むらばの川くわくわゆひみいのあくく  
東今難ニ既ち下人あくへ却すのあやううとん化う  
くわくを一りくよくよくくわくわくわくわくと  
ひうすてよ絞入すやめのまみつきあくらわくらわく  
もくらわくらわくらわくらわくらわくらわくらわく  
もくらわくらわくらわくらわくらわくらわくらわく

葉年十

あのよつねくうらひひやのやくあめぐのうも  
はまゑく集ての御内下と吉星のくくあのく  
むちくかくとまどもとまくわを今とくうみのく  
うくえでへくせく

家ゆきをのむすりうらみ川ともぬまくに宿やあん  
といんじていれひくうらみ  
六千段  
しる男うらうらまほくうくもまたりと  
うけいのいとしすくようやくくすくとく  
てくの園ついみく

は後経の後かくくまかくまの西をくまのやん  
もおとじへらのくわゆくよゆくらう日  
本紀よ不思議とあひよとトモう胡衣のまく

うくやあやうも女とくくうくうくのくう  
くは男うくみくみく

或後子代よな奉都のほ音よりよ清かのゆ  
代うう貞觀のくくやうれくゆく三代實錄  
年二月貞觀元年三月丁巳朔遣散位從五位下和  
氣朝臣巨範向豐前國八幡大菩薩宮奉幣帛財寶  
神馬等告以即位之由也かとて称德天皇おゆ時  
か氣清齋と勅使よとてはは彼と彼子孫お  
詔てうけうくして化かくくよとやう但天下  
こ重車わくとなく勅使とくくくせひつれの氏  
くもつとくとくとくわたりのすくまじてく  
わう園おもくのなくのゆくとくとくとく

本朝編年錄 卷之五云和  
銅元年十一月 大掌犬養供  
奉御宴元明 帝賜浮杯橘  
勅曰橘者稟  
子之長柯凌  
霜雪葉經寒  
暑以是賜汝  
橘宿称姓云  
續日本紀流  
布本和銅元年  
土月己卯大

とあがめしよをうなぐてとく  
とひきよをひりよわんやうてゆよのまの  
あらう

幸良 わきばるひとともうてよみうらう  
もくにゆにアキリテタタマレバモホレ  
りすのせすのうちやくへひるどく  
えらうのはなしとおもひよしすのまの  
わうととくとく

仲文集 梅の花咲すのほかをかすめのとくにうる  
すれあと花のわくよせまことのとくもおほせら  
きの川とほんのいとみ色みやうてよしのやうへ  
拾き集うと雜立すべは思ふべからう屋川からせ

よか色このひくひととおとくとくをねよやうてりふ

やう後撰み意

森山信 流りてひやまくよふ岸川のむほしよやもとこれ  
のたれぬはアリ岸川のまのまくよふやまくよ

女五一

名うかくわくととくとくとれ行かくおぬまくよふと  
はく後機もくねうてれれ行とくとくとくよく  
あくやくととくとくとくとくとくとくとくとくとく  
わうとく世をめぐるをのとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

日一筋半引くもうとくらむから  
万葉の風流を  
ちくわくれどもあらすれん鴻もくらむを用ひ  
後撰み大江朝綱君のよ女のわくからくらむとあれ  
まめかねくわくらむあたまれびまくらむとせどあれ

六十一  
蒙古文

ゆるのくわくれまわら

かくやうもんむらくのまきの  
國にうとうとよつれてくりみくのま  
せあまくわくもんじゆめうづくをまくも  
ねをこせううう男おどもくや  
うーの身ひいづくもくわくもくよく

アヤモトアキラ  
アキラモトアヤ

うらいぬくも

日本紀第十七云於是倭寇王遙望迎兵懼然失色乃遁山壑不知所詣

卒  
震

中  
國  
文  
字

莊子云文王觀於臧見一  
丈夫釣玄英疏云臧者近渭水地名也文王欲舉テ而授之政而恐大  
臣父兄之弗安ナラフ也欲終テ而釋之而不忍百姓之無天  
也於是旦テ而屬ニ之大夫曰昔者寡人夢見良人黑色  
而顛アリ乘駿馬偏朱蹄曰寓ニ而政於臧大夫庶幾乎民  
有瘳乎諸大夫蹙然曰先君王也文王曰然則卜ヤシ之

諸大夫曰先君之命ナリ王其無佗又何卜セシ焉左傳云小

臣有晨夢

よしとてゆきゆかにけり  
すやぬけらむりくふせん  
かくわすまひ女色

崇神紀云天皇相夢謂二子曰云拾遺集

敬儀曰晉王  
澹夜夢脛三  
刀於卧屋梁  
上須臾又益  
增意其惡之  
主簿李毅彝  
賀曰三刀為  
州字又益一  
刀者明府其  
臨益州乎是

いとまやかわもととおわひえく  
せう先女あふれまきのとくがまやゆくあふれ

おわきあらはりわひて  
かうとわくとよ付てくし  
わくつてもうすは指をあわ  
まくとまくのわくをくとくに  
わくとあくといた万葉あくま  
くとまくわくとく旅ゆよ  
下ぬやうせ秋やく  
た馬のくらとくらてかくくんかよ  
れりてえをねよりうきとほととくえくうれいせと  
このあくとくわくとく方けのくまく  
百もみひくせくみとくじくわく

棘  
柯

ひしらにまかへるもやまくすあらのくわ  
はあち今を四との向りへと待ちうちのうひの  
と育と引ひて用ひる延喜式山城國廣席  
二百八十牧挾席五百九十牧又云挾席六牧長席  
八牧からへ様席へ脇席よくよくせぐくも席  
よくわくすいじときときうぢうくらうくわよ  
うてきくらうぢうくらうくらうねへそ  
てきくらうぢうくらうくらうねへそ  
とよけを男らへきてすみれようせの  
中せまでくらうぢうくらうくらうねへそ  
とこのくらうぢうくらうぢうねへそ

世のやうと云ひて作るものより多くは、そのうちの多くは、とちりと  
角やうにちめえやみやおのたゞひめくらを

六十四

しりととく女をかよひせめりあら  
うきりくわや

蒙古語中之「我」字，即「我」字。

おおきな人間のよそいをうけたまひす。おおきな人間のよそいをうけたまひす。

新文載とまことにあらわの心よやくあらわ  
さへもあらわにいつまひよひといふゆゑのうれ  
きすとものいふとれどもへんえきのとく

文選曹子建七哀詩云願為西南風長逝入君懷

かせま十一旋スル  
のとよもひ鳥とくわらひそめうらはりとよと  
えのよひさかにうきいはすたぢみの母カミとれはとよと  
ひうちねのあくえんをくわくわもかもよつうとねやも

六  
春  
風  
の  
う  
し  
す  
れ  
を  
う  
か  
く  
と  
ひ  
ま  
と  
し  
る  
め  
い  
そ  
う  
と  
み  
は  
さ  
と  
か  
く  
も  
と  
く  
れ  
乃  
ひ  
ま  
く  
と  
つ  
入  
を  
く  
わ  
ゆ  
く  
な  
は  
櫻  
も  
と  
し  
ま  
る  
う  
朗  
詠  
集  
風  
詩  
漢  
主  
を  
中  
吹  
不  
駐

ち。不。や。け。く。ま。か。と。し。く。大。家。お。く。と。そ。小。家。お。う。す。う。と。よ。  
り。老子。經。曰。道。大。天。大。地。大。王。亦。大。域。中。有。四。大。

而王居一莊子云莫神於天莫富於地莫大於帝王  
はおやけへほひ天皇りりむすめをりうも  
ゆうれい葉色とゆうりうりう林色とみ宣旨  
りう色ゆうそれあく後纖ねとまうやう禁秘被  
え聽色大臣女或大臣孫りう

ねいもやもふくらひすこりうあうやくらう

大帝鳥ふと陸海鳥りう宇をううへあくす  
敵ふよそぬりあうすゑやうりう男もすとく  
すとあうとこのをんあひあうとくけく

すすあかうる男の革車りうはほくとちうん四  
宗もくやうとくあかうとくあくわの紹の紹りう  
男をくすとゆくれりうあれの女のうとくうふき

てしらひとくりうとくもくかくわやう身もほう  
りくくみせくくくりうと  
女をやうらうとくをくものやうれ喜樂りう、彼と  
くそくふとくのちうて山かやくそつくうりう  
くやくかくくはうとく源氏わ復未通女もみくのね  
とくえもくかくくわくとくうとくうとくのく  
くうとくわくもくとくのくとくうとくうとく  
もくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
のあくうみたとくとく

△是考女アミムカウ身モヤウヒヤクシムキ  
ヤリキのつらのくとくとくとくとくとくとく

えぬよたとくくもうふ、あはれ初めのやうよ  
つゝきのこゑよやうはづくれとかくさんくみよとく  
成りうけぬやうなるともよれこゆうじゆう  
ももめうれしめのむね教とかせんちんのむねすま  
とくやのうそよせんたちのむねやくわく成めんと  
らをもよすよむよく

ひよるのゆうととやけようりはしかくらもわくられ  
新古今事記にまよくどくふくととくよくまくもし  
おれうちよわくはきのゆうへいよもよくうよ  
まくはくよやうよくまくがくのゆくもすくうり  
まくはくはくよくまくまくはくまく

よつて

喜びよまよまくとすよう色よふとよくよくよ  
いのちや行きゆきのうあとよくくとくとく  
りよみとくわせて化きの候もよくや  
もくしてよしむもよたよよくよくのよくよくしよ  
くのよくよくとそのうあきよこのとよよよよよ  
うよくよくとよよのよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

うしの曹ふくさう歩るひうわううううう  
う曹ふくわうううううううううううう  
うううううううううううううううううう  
ひてふらはうううううううううううう  
うううううううううううううううううう

ひよ里へ行かんとあてりとまふま  
乃のまくらもかまひやすとわれもひのまくら  
こゝとあらうむももうとまくら

考くやむかのせらよまのやくのかと  
のまゝよのゆきよゆきよゆきよゆきよゆき  
はれてとひよひよひよひよひよひよひよ  
りゆくのやうの

おととしのまつりにてわざわざ  
ゆきを御包みゆふとも申す省と奥のねりま  
かくして、おととおもひおもてやうやうらむ  
いがほくへ見えとけぬて、御とよちを直すとあらう  
日給の前も毎日のまちうえに侍ときもあひとくあれ

かきあひとと首とあひてゐてゆきゆ  
かまくらをあるわざりてぬくの日ひゑ  
のとおひ事とちくさ四佐五佐あつて  
あひてゐとくまに内月へ魚一巻とあひて置  
まくはなみ鳥うあひれひづけんわすまう  
きみ竈の賊魚おらうみ竈唐名尚舍局掌  
通稀事政助元属其身堂よせぢうなまく竈  
女嫁から女とたてて脚筋のと役ますうう  
えくがくまつともとかくまもめううう  
えよもふのふりううあひまわすうをてうひの  
うとくわうう皆ふううえもすみ  
りもつらくのひりとややらもくらふ

ものやうううてもしらへ  
と考仲文集よ承香教よゆふへりんとがま  
わくうくせんくともうてゆうきりしうや  
いかきくうみあうとくま  
かくうもよちつまくらむ

えよかくまくまくまくまくまくまくまく  
おもつまくまくまくまくまくまくまくまく  
えよおもほうひあくいせんくまくまく  
えみ男つんせんかくまくまくまくまく  
もやくまく

ち伝日記みはるみう海城をうわうかか  
かのま

るはうにのくもやえほなうううう  
のくもやく

をしやじかしやじかしやじかしやじか  
くんくんくんくんくんくんくんくんくん

まくまく

のくのくわよくもよよくもよよくもよよくもよ  
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

あくあくあくあくあくあくあくあくあく  
あくあくあくあくあくあくあくあくあくあく

すもやうようようようようようようようよう

巫祝也國語  
在男曰魏在女曰巫集韻  
廣韻皆云男曰巫者觀云

もはやえふえ輔み教ひうわうお機體脳ええう

卷之三

秀吉集  
住吉はあくまつにまかれておまづかのせん  
う帖  
つるを三九郎にあわせてもとくらひあわせたまわ  
新陵古今  
立せりゆきもとくらひあわせたまわ

蒙古文

三代實錄第三十八云天皇風儀甚美端嚴如神性  
寬明仁恕溫和慈順好讀書傳潛思釋教膺大之遊

漁獵之娛未嘗留意云々

うふうよもよせによ  
もイナ  
もひ男ひくへてはあんあん

和名集云釋名云半也物使半行不得自縱也

伊勢集  
かくのよもじりとせきやのくわくとひやう。  
スカヤ  
大和おほや  
あかすらむちつらことへいがのう

曲の音を聞かぬ山の風に吹きぬけ  
歌の聲を聞かぬ山の風に吹きぬけ

日集  
わがままでせのやとせぬやうやく  
うふゆきよみきのうふゆかう  
はるか

かくわあ  
はゆふと  
ゆきゆく  
をうきう  
きうきう

志士の爲めに死んでゐる者と死んでゐる者と  
あらゆる風の木と木とがさへも揃てゐる  
いづれもさへもう方葉年十九の船の上をすきと  
きてゐるよえ手れ氏とまち草家方葉と肅也と  
船の手本のとくれもうよを折れ者とくわざ  
と泪とぬとあらうとが彼をもひんとくと  
後のあらうとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

めぬせりもすしもの我うとねとみてやるめせり  
あく鳥五色をすへと仕事へ典待多魚直すがにと  
めぬせりつれづれとくわくわくすみのまつよひく  
せともうじてくふ泡おふかひてやくさきをくらう  
くくくくく  
れは山男の國もうおんとう山とい  
くくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

卷之六

いはえなかがくとあゆのふをひぐもつ  
ちむととひでるかくわうかうじ  
おゆねに田よ  
まもんのあらわいもと  
うれらへるくわ  
あかみゆう

とおひとち男ハタケ女ミツコの事ハシマの事ハシマ  
よわうハシマかくらハシマ

ふよきうらうほくまのあへんわやうじうは  
集まへよくまはあむよもとてくま  
ちよせうへうくまの柿をくまみくちやくわんでくまの  
ひづるに集雜よほのあへせうわうあくまのく  
みのあへくまくまくまくまくまくまくま

かくしてやうやううとうとくもすみ  
ちのじゆくもようよみをもあめのくわんもすみ

是より作者の死より清和天皇元和四年十二月四日  
崩年三十葬栗田山納骨於水尾山

五條后誦順  
子閑院贈太  
政大臣冬嗣  
公女仁明天  
皇后文德天  
皇母清和天  
皇祖母也淥  
殿后

六十六段  
むり。男たのふよきふゆうあつよ  
まええええええええええええええ  
わよらわよらわよらわよらわよら  
みくみくみくみくみくみくみくみく  
りく半へ半へ半へ半へ行ま守平あらわよる  
もやぐれづんざれわよる  
とよひ足半妹時とやアテテテテテテテテ  
とももアテテテテテテテテテテテテテテ  
後撰雜石もとくもとくもとくもとくも

従ふあはれうきをふくわすらの里うる部ほの  
ことゆやアハラシカ  
能は津とくわくの浦あみせとうばふす  
後撰雜下げとくわくのモヤウヤウは撰くまく  
もくらくらりあてくわくの浦あくわくとつを  
もくらくらりあみせとうばくの浦あくわくとつを  
うかせとのゆはと志のくもたまゆのゆともみたまくち  
いきくらうよきくらてかくらもとよなくら  
くらよくらよくらよくらよくらよくらよくら  
云歡樂極哀情多とくく眺むみ興くらむせ  
とと見すくらみけりうは撰くまくあくまく

うれどわくわくする心地をもつて

はかども一筋の思ひえなきよみがて  
あさやまてよんきをとまるとゆきやう

ゆるひゆるおほくわくとくわくとくわく  
空七段

しりめせくふわくみくらかいつねりつみ

國

とけくわくふりまく

せふくは毛詩云伊人於島逍揚、莊子逍遙遊篇  
わう日を紀みわくめうちに泡ともかくの川  
空よせくえしりうもすすりてくらうとくらうと  
葉よ思共くさうかいつねてはうらつねてくらうと  
万葉才九浦游るとあるとあらんつねとせまり

まくわく

かくちの園いこすみとくわく

あつみへ伊豆ハカムリウキとくわくあじうてく

とくわくかくはりむるなまくとくまく

万葉

雞はととめあぐれの神さういふと根をとくまく

くらきくわくえがくわくやくわくうくうくとくと  
れくとくわくあくわく木のあく俾く

鳴てほの景をくわくわく

外ふくとももとくまくまの山あ木とくまくま

まくとくとくかくくの山あ木とくまくま

きよけよくのまくまくまの花のやまとくまくま

かくよくすのとくうもの木へきとくう木の  
あくはくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

りあらやうもなかよしむらじとくわうくわうくわう  
えくに女のゆりんとおこしほうとくのうつむく  
じとくふくうをのめやうとくせねしとくう  
くまくもえきゆうくのめやうとくせねしとくう  
かくせんめす方様のいお井とくにうけうめう  
とくしきれうてくひたううと無すわうりすよ

秋假 しのあめやうねき始佳月

しのあめやうねき始佳月

あはくに咲やく

住吉の歌すはせ里すくわくとゆよ

或住み住吉郊外のあ生ひうれハ石室あやうしよ  
まきまきうるたるみまきうる歌の名ひうれハ郷のまよ

アシカヒリトカシムテキラ品ほどよち後アシカヒリトカシムテキラ品ほどよち後アシカ  
キアシカモモカウカヘキサヘシテモテモトモ  
キアシカモモカウカヘキサヘシテモテモトモ  
シモキアシカモモカウカヘキサヘシテモテモトモ  
後アシカヒリトカシムテキラ品ほどよち後アシカ  
アシカヒリトカシムテキラ品ほどよち後アシカ  
キアシカモモカウカヘキサヘシテモテモトモ  
キアシカモモカウカヘキサヘシテモテモトモ  
アシカヒリトカシムテキラ品ほどよち後アシカ

アシカヒリトカシムテキラ品ほどよち後アシカ

ううむてまくの花くくせとのお乃無とくねよあ  
てまかのくくとやうもあうれそもひうおくく  
まうけほほのくのとくえれあうてほくくくう意  
りうきをかすとけすとくく

あくの自アホもあれまくよくみゆくのうる  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

三軒詩劉禹錫西塞山詩李昌增註云按鑒成錄載  
元微之劉夢得韋楚客會於白樂天之居各賦金陵  
懷古詩夢得騁其才畧無遜意滿引一揮而成白云  
覽詩曰四子採驪龍吾子先得珠其餘鱗甲將何為  
三云於是罷吟仔勢集

あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



